

# 大堀から の10年

ライフミュージアムネットワーク 2020  
地域資源の活用による地域アイデンティティの再興プログラム

## ライフミュージアムネットワークとは

福島県立博物館は、二〇一一年の東日本大震災と東京電力福島第一原子力発電所事故後、文化庁の支援を受けた「はまなか・あいづ文化連携プロジェクト」「ふくしま震災遺産保全プロジェクト」の事務局をつとめ、さまざまな文化芸術による復興支援事業を実施してきました。その過程で浮かび上がってきた課題は、福島、東北、被災地に限らず、日本各地に共通するものであり、解決方法を導き出すべく、広く共有されるべきものでした。それらの課題は「いのち」「くらし」に集約されます。これらは各地の博物館・美術館・資料館・記念館を含むミュージアムの活動の核となっているものであり、ミュージアムに限らず、さまざまな団体、機関も大切にしていることです。東日本大震災後、新たに浮上してきたミュージアムの使命。それは「いのち（ライフ）」と「くらし（ライフ）」に再び誠実に向き合うことと捉え、ライフミュージアムネットワークでは、同じ志を共有するネットワークを強化・拡大することでミュージアムの社会的使命を拡張していきます。二〇二〇年度は、これまでの活動を継続するとともに、ソーシャルインクルージョン、地域資源の利活用とネットワーク構築、地域アイデンティティの再興を軸に、ライフ（いのち・くらし）に向き合うミュージアムの実践を行います。

## プログラム開発について

ライフミュージアムネットワーク2020は、現在の福島で求められるミュージアムの新たな役割を「お互いの多様性を認めながら、過去に学び現在をつくり未来を考える場を生み出すこと」であると考え、その役割を実現するための機能の拡張を模索するプログラム開発を行いました。テーマは三つ。「多様なニーズに応えるミュージアムの利活用」は誰のためでもあるミュージアムの試行。「生活資料を活用したミュージアムの連携プログラム」は地域に残る生活資料の利活用と地域ミュージアムの連携の試行。「地域資源の活用による地域アイデンティティの再興プログラム」は地域資源の価値の再定義と編集による地域アイデンティティ再興の試行。三つのプログラム開発では、どの地域のどのミュージアムでも、素材や場所を入れ替えることで実施が可能であるかどうかも探りました。ミュージアムの新たな活用が、それぞれの地域課題の解決につながることを願っています。

## 地域資源の活用による地域アイデンティティの再興。プログラムについて

本事業は、地域資源の価値を再定義し、編集しなおすことによって、地域アイデンティティの再興を試みるもので、福島県双葉郡浪江町の伝統的工芸品である

大堀相馬焼は、江戸時代から三百年以上続く浪江町の主要な特産品です。しかし、二〇一二年の東日本大震災および東京電力福島第一原子力発電所の事故を受け、大堀相馬焼の関係者は町外へ避難・移住せざるを得ない状況となりました。

本事業では、大堀相馬焼に関わる幅広い

立場の方々を対象に聞き取り調査を行い、

アーカイブ化することで、地域の文化資源

がそこで暮らす人々にとってどのような存

在なのかを浮かび上がらせる目指しました。

本事業のリサーチをお話を伺ったのは、

大堀相馬焼の窯元をはじめ、作家として活

動をしている方、職人として窯元からの仕

事を請け負っている方、他の地域から来て

後継者になろうとしている方、組合の職員

として働いていた方、また、大堀相馬焼を

通して移住先の方々と繋がりを持った方、

さらに、浪江町商工会の関係者や、浪江町立小学校の教員、震災後浪江町外で暮らし

ている町民の皆さん、大堀相馬焼のコレクターや、そして地域のミュージアム関係者といつた方々です。

1. 地域の文化資源のあり方を探る実践的研究のモデルとして  
本事業のように幅広い視点で地域の文化資源について記録することで、ある土地にとつてある文化資源がどのような意味を持つのか、一つの事例を多様な主観で捉えたアーカイブが出来上がりります。
2. 伝統産業の復興の道標を示すモデルとして  
本事業では、浪江町の伝統産業である大堀相馬焼を一例として、東日本大震災と原子力発電所事故で被災し、他地域で避難生活を送られた方々がどのようにして新しい日常を受け入れたのか、その生活の中でどうやつて自立したのか、別の生き方を見つけることができたのか、そしてその中で大堀相馬焼はどうな存在であったのかについてお話をお聞きしました。

災害は潜在化していた地域の課題を顕在化させます。東日本大震災と原子力発電所事故で被災した大堀相馬焼でも、震災前から懸念されていた様々な問題が、震災を経てより明白となつたという面があります。

本事業における調査手法を一つのモデルに、地域の文化資源についてリサーチを行なうこととは、その土地の文化資源のあり方や多面性を見つめなおすこと、地域アイデンティティを捉えなおすことに繋がるとともに、存続が危ぶまれる産業の再興や、事業継続への手がかりを掴むきっかけになるのではないかでしょう。

さらに、このような幅広い立場の関係者に及ぶリサーチは、県立博物館という利害

# 目次

ライフミュージアムネットワークとは・プログラム開発について

地域資源の活用による地域アイデンティティの再興プログラムについて

大堀相馬焼について

志賀暁吉

陶俊弘

小峰和子

小野田紀恵子

根本清己

亀田大介

リサーチ6

松助窯・亀田集古館

リサーチ5

リサーチ4

リサーチ3

五藤かおり

原田雄一 半谷秀辰

リサーチ7

山田慎一 吉田直弘

リサーチ8

一本松コスモス会

リサーチ9

浪江町立津島小学校 木村裕之 武内弘子

リサーチ10

末永福男 堀耕平

リサーチ11

青砥和希「大堀相馬焼リサーチを振り返って」

福留邦洋「地域を象徴する、

記憶に残る工芸品としての大堀相馬焼」

堀耕平「地域資源の活用と博物館の役割」



P.22



P.18



P.16



P.14



P.12



P.10



P.8

※本書はインタビューの一部を抜粋し掲載したものです。

38 36 34 32 30 28 26 24 22 20 18 16 14 12 10 8 6 3 2

## 「10年間ふるさとなみえ博物館」



P.34



P.24



P.26



P.34



P.24



P.28



P.28



P.30



G.30

# おおぼりそうまやき

## 大堀相馬焼について

福島県双葉郡浪江町大堀地区を中心とする焼きものの生産は、江戸時代・元禄年間（二六九〇年頃）に、相馬中村藩士半谷休閑と下僕左馬により開始されたと言われています。

開窯以来、庶民向けの日用雑器を主に生産してきました。藩の庇護下で生産規模や販路を拡大し、江戸時代末から明治時代初頭にかけて、大堀とその周辺地域は百軒の窯が稼働する焼きもの一大産地となりました。

明治時代になると廃藩置県により藩の援助がなくなり、また交通網の発達による他産地との競合などを背景に、産業としての規模は大幅に縮小しますが、一千数軒の窯元が現代まで三百年以上にわたり窯の火を受け継いでいます。

相馬地方で産する焼きものは総じて「相馬焼」と呼ばれていましたが、一九七八年（昭和五十三）に大堀の相馬焼が国の伝統的工芸品に指定された際、産地の名を冠した「大堀相馬焼（おおぼりそうまやき）」を正式名称とすることになりました。

二〇一二年（平成二十三）三月十一日に発生した東日本大震災、そして東京電力福島第一原子力発電所の事故により被災した浪江町では、全ての町民が避難を余儀なくされました。現在

も大堀地区は「帰還困難区域」に指定され立入りが制限されており、大堀相馬焼の関係者は本來の産地での事業を再開できない状態にあります。

震災直後、窯元が県内外の避難先に分散するなど困難な状況に置かれる中、大堀相馬焼協同組合では再興へ向けた準備が進められました。震災翌年の二〇一二年（平成二十四）七月には、窯場のほか、ろくろ場、陶芸教室、会議室、事務室、売店、倉庫などを備えた「陶芸の杜おおぼり一本松工房」が、浪江町が役場機能を避難させた福島県一本松市にある小沢工業団地内に開設され、組合の新たな拠点施設として再出発しました。役場の浪江町への帰還に伴い、

二〇一九年（平成三十二）三月末をもって一本松工房は役目を終え、現在は浪江町内にある道の駅みなみに隣接する拠点施設での再開に向けて準備を進めています。

## 大堀相馬焼の特徴

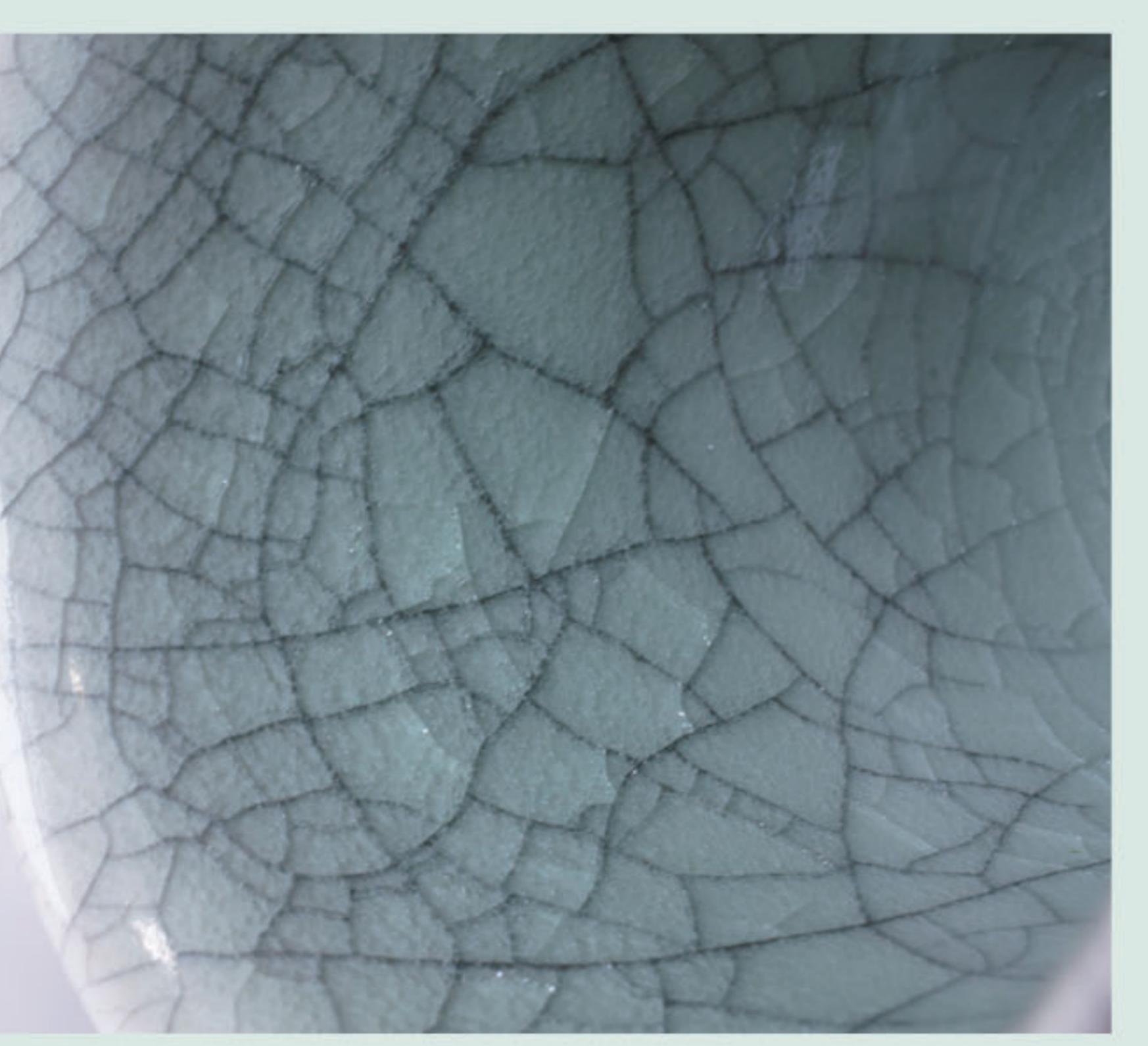


小野田紀恵子 画

### 1 駒絵

こまえ

疾駆する馬の絵は、大堀相馬焼の目印とも言える文様です。十八世紀末～十九世紀初めに鉄絵の技法が導入されたのとほぼ同時に描かれるようになつたと考えられています。描かれるのは馬具を身に着けない野馬です。相馬地方は馬の产地であり、野馬を捕らえる軍事訓練や神事に由来する「相馬野馬追」が現在も行われています。駒絵は相馬地方のシンボルを表したものなのです。



### 2 青ひび

あおひび

大堀近辺で採掘される砥山石を原料とする釉薬が使用されています。器を素焼きした後、この青ひび釉をかけて本焼きすると、窯出しの際、素地と釉薬の収縮率の違いにより器の表面に小さな亀裂（貫入）が生じます。そこに墨を擦り込み、亀裂を目立たせることで「青ひび」の肌を生み出します。

東日本大震災後、砥山石は入手困難となり、青ひび製品の存続が危ぶまれましたが、福島県ハイテクプラザで研究が進められ、震災翌年、代替青ひび釉の開発に成功しました。現在ではこの新たな釉薬を使用した青ひび製品が作られています。



### 3 二重焼

ふたえやき  
にじゅうやき

器の外側と内側を別々に作り、乾燥させた後、口縁の部分で貼り合わせてひとつの器にします。明治時代に開始されたと考えられる二重焼は、大堀相馬焼の良質な陶土と作り手の技術の高さの表れであると言えます。二重焼の器には、外側の一部を花びら形にくり抜く「花抜き」の技法がしばしば併用されます。



# 小峰 和子

こみね かずこ



大堀相馬焼窯元光峰窯の小峰和子さん。白河市出身で、地方公務員の父の転勤に伴い小学5年生の時に浪江町に移住。大堀相馬焼の窯元の家に嫁ぎ、子育てが落ち着いた35年前頃から焼きもの作りを始め、震災当時は和子さんが窯元当主。震災後は娘が住んでいた栃木県宇都宮市に移住しました。

リサーチ1  
日 時：2020年7月15日（水）9:30～  
場 所：小峰さんの自宅（栃木県宇都宮市）  
聞き手：原恵理子（福島県立博物館学芸員／ライフミュージアムネットワーク実行委員会事務局）  
山口 拡（福島県立博物館学芸員／ライフミュージアムネットワーク実行委員会事務局）

やつぱり主婦の立場で、  
こういうのあつたらいいなっていうのを  
どんどん作つていつて。

大堀相馬焼の窯元にお嫁にいくのって大  
変そつって思いませんでしたか。

小峰 考えなかつた。逆に珍しくて、瀬  
戸物つてこうやって作るんだみたいな感じ  
でした。小学校の遠足で大堀に行つたくら  
いで、そこに住んでたわけじゃないから、  
あんまり嫌な面つていうのは見てないです  
よ。入つてみたら、ああ大変なんだって。  
一番下の子が幼稚園に入る頃、三十五年ぐ  
らい前から作り始まつて、宇都宮に来て十  
年になるから二十五年ぐらいやつてたのか  
な。で、作り始まつたら面白くて、もとも  
といろいろ作るのは好きだつたんです。  
小峰さんは手びねりの器を作つてらした  
んですね。

小峰 相馬焼つて食器類が少なかつたん  
ですね。いわゆる茶器とか酒器とか、あ  
と花瓶も大きくて飾つておくだけみたいな  
もので。私はどつちかつて言うとその辺に  
咲いてる花を活けるのが好きだから、そ  
ういうのからちょっとずつ作り始めて。食

器類も、職人さんは男だから、やつぱり主  
婦の立場で、こういうのあつたらいいな  
っていうのをどんどん作つていつて、ですね。  
小峰さんが作り始めた頃は窯元の女性は  
あまり作つてなかつたんですか。

小峰 そんなに作つてなかつたですね。女  
人は馬を描くとか釉をかけるとか、ひ  
びに墨を入れるとか、そういう補助的な  
仕事ばかりだつたんですよ。私がやり始  
めた頃から、女人の人らも作るようになつて、  
釉薬もいろんな使い始めたから、これど  
こどさんの器つて分かるようになつてき  
て。私の義理の父の代は相馬焼つていう  
と、青ひびで、二重で、馬が描いてあるみ  
たいなのがほんんどだつたんですね。時  
代もあるんでしょけど、女人人が目覚  
めてきたんだと思いますよね。こういう食  
器あつたらいいなとか、女人人の感覚です  
もの。

そういうものを作ることに反対されたり  
しましたか。



小峰 ありましたよ。最初の頃は、そん  
なもの売れるかとか言わされました。で、だ  
んだん売れ出したら、もつと作つたらとか  
言われて。私は職人さんが作るような  
形の同じきちっとしたものじゃないから、  
そういうものが売れるつていう感覚がたぶ  
んなかったんだと思います。私がまだあん  
まり作つてない頃に、お客様に相馬焼つ  
てどこかのうち行つても同じだから一軒見た  
らあとはもう見なくてもいいなって言われ  
たんですよ。これはまずいなと思って。だ  
からこういう他にはない自分ちだけのもの

を作つておけばね、相馬焼プラスこういう  
のもあるよつて見てもらえるから。  
和子さんが自分のオリジナルの器を作つ  
ていた時つて、相馬焼を作つているという  
感覚なんですか。それとも別の？

小峰 いや、相馬焼の器として作つている  
という感覚でしたね。砂鉄混ぜたら雅物、  
焼の流れとか。いくら伝統の焼きものでも、  
生活様式も違つてくると、多少はやつぱり  
変わつていかないと長くは続いていかない  
ですよね。

震災後は焼きもの作りはされていないん  
ですか。

小峰 震災後、急にバタンつて仕事ができ  
なくなつたのがもう本当にストレスで。そ  
れを克服するのに三年半ぐらいかかりま  
した。娘たちからお母さん仕事をやめ  
良い機会なんぢやないのつて言われて頭で  
分かつても、自分の気持ちが整理できな  
かったみたいな。今はもう焼きもの関係は  
全然してないです。でも、楽しかつたです  
よ。自分が好きなように作つて、お客様に  
買ってもらったという時期をもらえたの  
は嬉しいですね。自分の好きなものが商  
売、仕事になるつてないですから。

あちらにあるバッグ、編んでらっしゃるの  
かな。

小峰 今ね、頼まれて作つてるんです。  
なるほど。いや、そうだと思いましたよ。

小峰 クラフトバッグ作りをやつて  
NPOの方がいて、それで教わつて始まつ  
た。で、一年半ぐらいは小物作りをやつて、  
去年の七月からバック作りを習つて作つて  
たらどんどん人に頼まれるようになつて。  
今、まだあと十個ぐらい作らなきやなら  
ない。二ヶ月待ち。

すごいですね。でも何だか、焼きものを  
作つてた時と同じ何かが働いてる気  
が。小峰さんの中で全部繋がつてゐる感じ  
がします。

小峰 たぶんそつだと思う。大変なんだ  
けど、楽しいですよ。生きがいを見つけて  
ね、暮らしてます。



制作中のバッグ



宇都宮市の自宅と庭



小峰さんが作った器



小峰和子さん

# 志賀 晓吉

しが あきよし



釉薬の剥がれた箇所を指し示す志賀さん

## 志賀さんのギャラリー



志賀さんの作品



# ギャラリーからの風景

すけど、今のお話で、全然違うものだつていうことがわかりました。大堀相馬焼とは別物なんですね。

A photograph showing three individuals in a room, all wearing white face masks. On the left, a person with long brown hair tied back is seated at a wooden table, gesturing with their right hand while speaking. They are wearing a black t-shirt, camouflage pants, and black Vans sneakers. In the center, another person with dark hair and glasses is seated at the table, looking down at some papers or a book. They are wearing a black t-shirt and light-colored pants. On the right, a woman with dark hair tied up is standing and holding a red folder or book. She is wearing a maroon top, a light-colored cardigan, dark pants, and floral sneakers. The room has white walls, a dark wooden door, and a window with vertical blinds. A framed picture hangs on the wall above the person on the left.

自分の場合は全部一個のものとして作るの  
で。十個作つても五個ちゃんと焼き上げれ  
ばいい方で、失敗ばかりなので。こういう  
ものを作りたいと思つて、一個だと失敗す  
る可能性があるから、二、三個作るんです  
けど、全く同じには絶対作れないですし、  
作らないようにしてます。

失敗つてのは何が失敗にするんですか。  
志賀　ここにあるうちの三つは失敗してい  
るものなんです。これだと、釉薬がちよこつ  
とだけ剥がれてる。これだけでもうダメで。  
一般的な焼きものつて、相馬焼もそうなん  
ですけど、普通、釉薬つてたぶん一ミリな  
いくらいの厚みでかけるんですけど、例え  
ば湯呑一個は、釉薬をかけるのに、たぶん  
十秒もしないでかけ終わっちゃう。でも青  
磁は、すごく薄くつくて、三、四ミリの  
厚みで釉薬をかけるんで、釉がけをする  
となると丸一日かかるんです。四回五回重

ねてかけるんで。それもただ重ねるんでは剥がれちゃうんで、一回かけて、完全に乾かして、もう一回かけて、の繰り返し。壺とかだと丸々二日とかかかるんで。釉薬を厚くかけて、それで欠点を出さないようにするのが難しいですね。

失敗したものでも欲しいという方がいたら売りますか。

志賀 売らないです。そういうのって世に出でくと、それが自分の評価につながりますからね。基本的には捨てるだけですね。茶碗とかだったら、うちで子供が使って、欠けたりしたら捨てて。失敗したのなんていっぱいあるんで。

ひとつ焼きものの産地の中でも、お話を伺つていくと、その焼きものは作つていないという方もいらっしゃつて。大堀だけど、大堀相馬焼だけじゃない。でもそれがその産地の本当の姿だとも思います。

大堀相馬焼窯元吉峰窯の長男として生まれた志賀暁吉さん。震災前から、大堀相馬焼とは一線を画した、一点ものの作品を制作する青磁作家として活躍していました。2007年に日本陶芸展「大賞・桂宮賜杯」受賞。震災後は、栃木県那須塩原市や福島市などでの避難生活を経て、2014年に新地町に工房・ギャラリーを開設。個展や企画展に出品するなど活動を続けています。

リサーチ

日 時：2020年7月28日（火）13:00～  
場 所：志賀さんのギャラリー（福島県相馬郡新地町）

聞き手：原恵理子（福島県立博物館学芸員／ライフミュージアムネットワーク実行委員会事務局）  
筑波匡介（福島県立博物館学芸員／ライフミュージアムネットワーク実行委員会事務局）

第十一章 中国古典文学名著与现代传播学研究

お父さんが吉峰窯の三代目で、大堀相馬焼の伝統工芸士でいらっしゃったんですね。仕事に対するはどういう感じの方だったんですか。

志賀 どうだろう、自分とは全く逆なので。父は完全に大量生産な感じで。元々全然考え方も違うし、自分は一個のものをすごく集中して作るけど、父は流れでいっぱい作るところは全然、違いましたね。

大人になつて職業を決める段階になつて初めて焼きものをやろうと思つたと伺いましたが。

志賀 長男なので、やんなきやいけないような環境で育つたので。で、どうせやるんだつたら相馬焼はやりたくないなくて。やるんだつたら作家としてやりたいってのがあって。圧力つてわけじやないんでしようけど、特に祖父母は、今思うと、弟と自分とで扱いがちよつと違うような気はしていました。名前も、暁吉の吉、吉峰窯の吉つてい

う字は、父もついてて、祖父もついてるんですけど。自分の子供にはつけてないですか

技術面では、埼玉の専門学校で技術を修得されたんですね。大堀に戻られたきっかけは?

志賀 早く青磁をやりたいってだけです。自分の作品をつくって早く発表したいっていうのが強くて、ですね。窯は、別の窯を買ったのと、父が使わなくなつた窯を自分で少しいじつて使つていました。

焼きものにもいろいろある中で、ご自身の作品として青磁を極める方向に決められたのはどうしてですか。

志賀 専門学校が作家を育てる感じの学校だったので、授業で東京の公募展の展覧会に行って、そこで青磁の作品を見て。最初はそれがきっかけです。青磁のことを調べたり見たりして、そこから興味を持つて、という感じですね。

志賀さんの工房は、土足厳禁で埃がつか

ないようにしていて、精密機器を作るようなお仕事をされてるなと思いました。志賀　そうですね。ろくろの部屋と、釉かけや作品を置いておくところと、あと窯があるところ、三部屋全部スリッパ履き替えて。窯で出るごみつて、釉薬に混ざると良くないですし。釉薬にろくろ場で出た粘土の欠片が入つても駄目なんで。そこはもう気を遣つて、開けつ放しには基本しないです。



吉賀時吉文

# 陶 俊弘

すえ としひろ

リサーチ3  
日 時：2020年8月8日（土）9:30～  
場 所：陶さんの工房（長野県駒ヶ根市）  
聞き手：原恵理子（福島県立博物館学芸員／ライフミュージアムネットワーク実行委員会事務局）  
筑波匡介（福島県立博物館学芸員／ライフミュージアムネットワーク実行委員会事務局）

## 僕は相馬焼から受け継いできたから こういう仕事を土台にできたから 良かったのかなとは思います。



大堀相馬焼窯元大陶窯の陶俊弘さん。震災前は父・俊明さんとともに大堀相馬焼づくりに携わる傍ら、自身の作品として白磁の器を制作していました。震災後、窯業学校でゆかりのあつた愛知県瀬戸市に移住し、いち早く作陶を再開。2018年に長野県駒ヶ根市に工房を設け、制作を続けています。



震災の後、本当にすぐ焼きもの作りに取り掛かったんですね。

陶 すぐでした。多分、被災した作り手の中ではかなり早かつたんじゃないかと思うんですけど。四月中旬ぐらいには、工房も借りて仕事が始まっていたので。

大堀相馬焼関係の方々は、県内に新しく工房を作った方が多いんですけど。県内に、というふうにはあまりお考えにならなかつたんですね。正直県内だと自分が避難者であることを意識し続けてしまうよう気がして、それがちょっと嫌だったっていうのもあるんです。もちろん福島県自体には愛着もありますし、親戚づきあいもあるので、すっかり福島と切り離すっていうわけでもなかつたんですけど。ただ別な土地に居場所を見つけられればと。

陶 陶さんの白磁は、いわゆる大堀相馬焼とかけ離れた見た目をしています。白磁に至つた経緯は？

と地元に寄つた器をつくれればなというふうに思つてたんですけど。とりあえず当面は自分が個人的にも好きだったこのシンブルな白磁をやりながら、何か積み重ねていければと思つてたんです。

陶 あらためて、大堀の良いところ、悪いところを聞かれたらどういうふうにお答えになりますか。

陶 窯元同士の繋がりは強かつたので、そういう良いところはありました。逆にその裏返しで、繋がりが強すぎていさかいことがあつたりすると、すぐやりづらいので、その辺に気を遣わなきゃいけないっていうのはありました。窯元の方々は皆個性がありつていて面白かったです。僕らの上の世代とは少し隔たりはあつたかもしませんが、近い世代の人達はそれなりにそれぞれ、繋がりやすいというか。すごく風通しも良かったですし、雰囲気のいい世代だったと思うんです。地域の雰囲気はのどかで良かったです。そんなに産地としても全国的にメジャーじゃなかった分、がつがつしてなかつた感じもあります。

陶 今回の震災は、十年経つても元に戻れないというところがあります。

陶 やっぱり今まで馴染んできた暮らしに戻りたいと思いますもんね。僕がすぐ焼きものの仕事を再開したのも、自分の当たり前だった日常を少しでもそれに近いものを取り戻したいっていうのがあって、すぐ動いたっていうものもあるんです。結果的には随分違った形態で続けることになつてしまつたんですけど。それはそ



陶さんの白磁の作品



父・俊明さんの絵を参考に練習した馬の絵



息子さんと一緒に

れでいろいろ学びもできたんで、良かったかなと。  
そもそも復興つて何なのかつてあまり正解がないと思うんです。

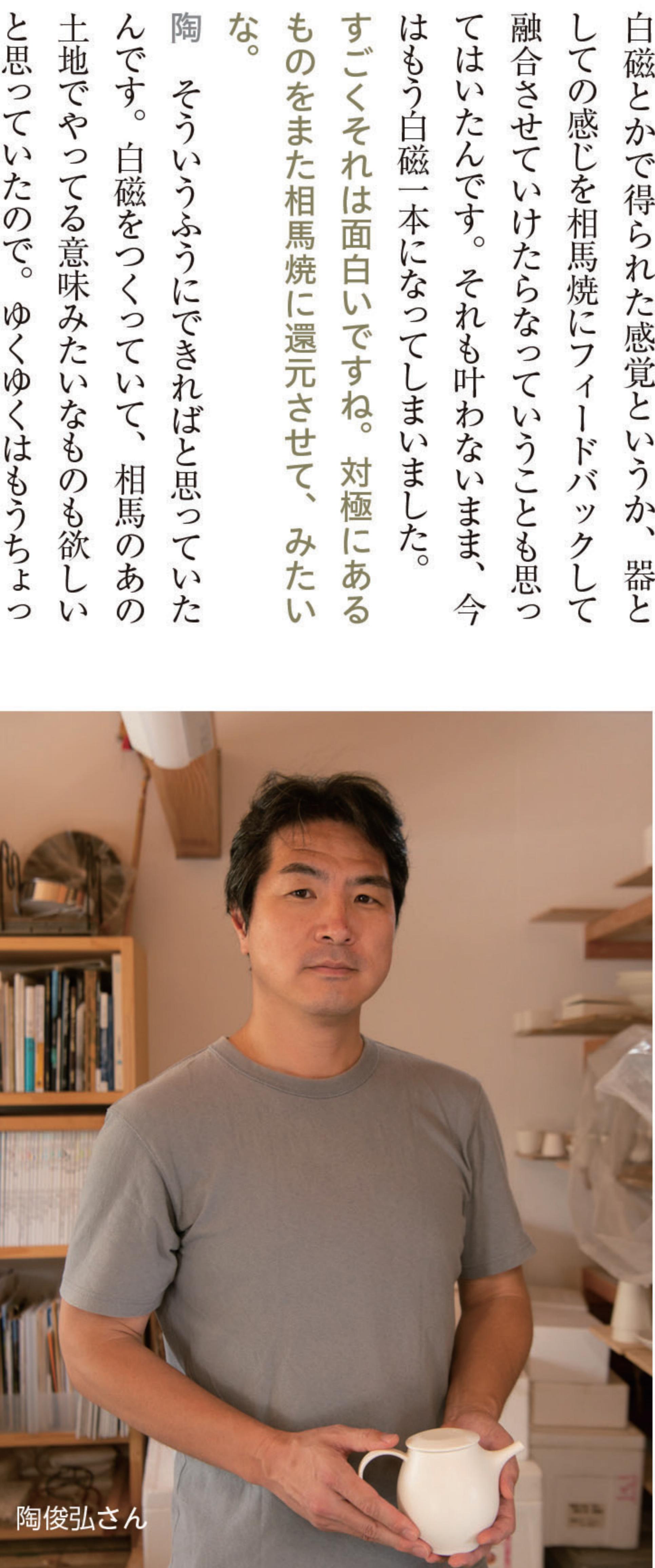
陶 「復興しました？」って聞かれたら、どう答えます？

陶 復興つていうのと違う道に来てる感じがするので、自分が復興してるとは思わないです。復興じゃない未来に来ているというか。「復興してやるぞ」って思つて、あれから生きてはきてないです。うちでは「なっちまつたものはしようがない」とよく言つてきたので、それでもう割り切りができる事はあるのかもしれない。

陶 何もなかつたとして、あの頃の暮らしに戻りたいかつて言われたら、戻りたいと答えるかもしれないけど。そういう状況でも何か後悔していることはそういう面ではないで、と、それはそれで嬉しい。だんだんそういう意識から離れていくような感じはありますかね。僕は相馬焼から受け継いだかったのかなとは思います。

陶 相馬焼の青ひび釉つて正直盛りにくいうか、食卓で使いにくい色合いじやないですか。癖のあるというか。他の伝統的な釉薬もいくつかあるはあるんですけど。相馬焼つていうとやっぱりあの青ひびのイメージが強いじゃないですか。そういうのが僕は個人的にはどうだろうなと思っていて。それで、対極にあるような白磁とかで得られた感覚というか、器としての感じを相馬焼にフィードバックして融合させていけたならなっていうことも思つてはいたんです。それも叶わないまま、今はもう白磁一本になつてしましました。すごくそれは面白いですね。対極にあるものをまた相馬焼に還元させて、みたいだ。

陶 そういうふうにできればと思っていたんです。白磁をつくっていて、相馬のあの土地でやつてゐる意味みたいなものも欲しいと思っていたので。ゆくゆくはもうちょっと白磁一本になつてしまつました。それを叶わないので、もう一度白磁一本になつてしまつたんです。



陶俊弘さん



工房からの風景

# 小野田 紀恵子

おのだ けいこ

リサーチ4  
日 時：2020年10月15日（木）13:00～  
場 所：小野田さんの自宅近くの集会所（東京都中野区）  
聞き手：原恵理子（福島県立博物館学芸員／ライフミュージアムネットワーク実行委員会事務局）  
山口 拡（福島県立博物館学芸員／ライフミュージアムネットワーク実行委員会事務局）



40代の頃の小野田さん



小野田紀恵子さんは、浪江町幾世橋出身。大堀相馬焼窯元勘治郎窯（小野田窯）に嫁ぎ、夫で当主の一洋さんが体調を崩してからは、一洋さんのアドバイスを受けながら自身で釉薬の調合や窯焼きをしていました。震災後は親戚がいた東京に避難し、中野区の公営住宅に移住。地域の陶芸教室に通ったり、伝統工芸関係のイベントや祭りなどで馬の絵付けを披露したりしています。

相馬焼知ってる人いるからね。  
そつちこつちに行くと  
みんなと繋がつてね。

小野田さんは浪江町のご出身なんですね。窯元にお嫁にいくまでは焼きものとかはされてなかつたんですか。

小野田 はい。幾世橋っていうところなんですが、やっぱり遠いですからね。うち農家で、古い相馬焼は持つてたんですよ。でも、普段使つてたのは瀬戸物で、相馬焼は使つてませんでしたよね。私が嫁に来てからは、冠婚葬祭のお引き物に相馬焼の花瓶とかね、茶器セットとかコーヒーセットとかが結構広まつてしましましたけども、私たち小さい時の冠婚葬祭の品物は毛布とかでね、そういうのはあんまり使わなかつたもんね。

技術面は舅さんから習つたことですか。

小野田 そうですね。うちのおじいちゃんが、制度が始まって第一回目の伝統工芸士だつたんですよ。作るほうの伝統工芸士ですね。絵付けの伝統工芸士もいて、だいたい夜に、窯元の息子とか、私たち嫁と

かが集会所に集まつて、伝統工芸士の人後継者に教えるなきゃなんないんで、作るほうの人は作るの教えて、馬描く人は馬描くのを教えてたわけね。

小野田 そうですね。それぞれの窯元に職さんがいましたからね。繁盛していくと、お客様も、観光バスも来るしね、あと下働きも見えなきゃなんないしね。お茶の用意とか、職さんにご飯の用意とかね、育ても終わつて、少しゆとりが出てからは、自分でいろいろ作つて楽しかつたですよ。私も絵は好きだったんですけど、小さないときからね。でも、実際描こうとは、嫁に行つた頃は思つてなかつたんですね。馬ばつかりだからね。

小野田さんは二〇一一年の五月に東京に来られて、どうでしたか、大堀とは全然違つたと思うんですけど。

小野田 そうね。仕事だね、やっぱり。何にもなくなつたからね。年々、体が弱つてくるしね。でも気をつけなきゃなんないと思ってね。

こちらに来られてわりと早く、二〇一一年の十月に、陶芸教室で馬の絵を描いたりされてたんですね。

小野田 そうそう。中野区で、三十年ぐらい前からやつてる陶芸教室があつて、そこに入ったんだけど、そこにいた先生に「馬描いて見せて」なんて言われてね。あとね、青山の伝統工芸館に、たまたま私、お父さんと見学に行つたんですよ。そしたら、益子焼の会長さんが何かで来つて、女性の伝統工芸士を全国から集めて企画展やるから、小野田さんは資格なくとも長年のキャリアがあるから、会期中毎日ここに来て馬描いて見せてって言われたの。全國のね、京都の織物とか、肥後象嵌とか、あと備前焼とかのお母さんたちと、お友達になりましたよ。

小野田 楽しかつた。懐かしいって言う人がいたりね。「ああー、観光バスで行ったことがある」とかね。鮫川とタイアップして観光地になつてたからね。鮫川のあと相馬焼見学に来てね。懐かしいよね。そつちこつちに行くと相馬焼知つてる人いるからね。



「あら、窯元だつたの！」なんてね。やっぱり商売してれば、みんなと繋がつてね。相馬焼を知つてる人がいると、そこからまた繋がりがでたりしますよね。



小野田紀恵子さん

# 根本 清己

ねもと きよみ

リサーチ5  
日 時：2020年10月20日（火）13:00～  
場 所：根本さんの工房（福島県南相馬市）  
聞き手：原恵理子（福島県立博物館学芸員／ライフミュージアムネットワーク実行委員会事務局）  
筑波匡介（福島県立博物館学芸員／ライフミュージアムネットワーク実行委員会事務局）

## どれだけ後世に 伝えていけるか、ですね。



「つくり」を披露してくださった根本さん。湯呑、急須、徳利があつという間に出来上がった



南相馬市の根本さんの工房

大堀相馬焼の職人、根本清己さん。大堀相馬焼窯元清山窯の3代目として家業を継ぎ、30代で窯元をやめ職人として仕事をするようになりました。震災後は南相馬市に移住し、2016年に工房を開設。県内各地に分散する各窯元から、成形や絵付けなどの仕事を請け負っています。

根本さんの家はもともと窯元で、根本さんの代で職人さんになられたんですね。  
根本 昔は問屋渡しが主体だったんですね。焼いたら問屋に納めるっていうような。当時大堀に問屋さんが四つくらいあったかな、でもドルショックで輸出がダメになつてからは、問屋制が崩れくんだけよね。ほんで問屋も自分で窯持つようになつたり。うちなんかは小売りを始めるのにもう出遅れていて、車もなかつたから販路も拡張できなってなつて。これでは採算取れないとということで、窯元はやめたわけなんですが。二十六歳からは四年間販売をやつて、東北六県や、新潟、関東とかで実演販売したんですよ。販売としてはすごくいい経験でしたけど。そんな中で、何で職人になつたかつつうと、大堀の窯元が半径五百メートル内にあって、俺の家はちょうど真ん中ぐらいで、馬描きも作りも、焼くまでの仕事全部一応こなすから。他の窯元さんから「今日空いてる？馬描きあ

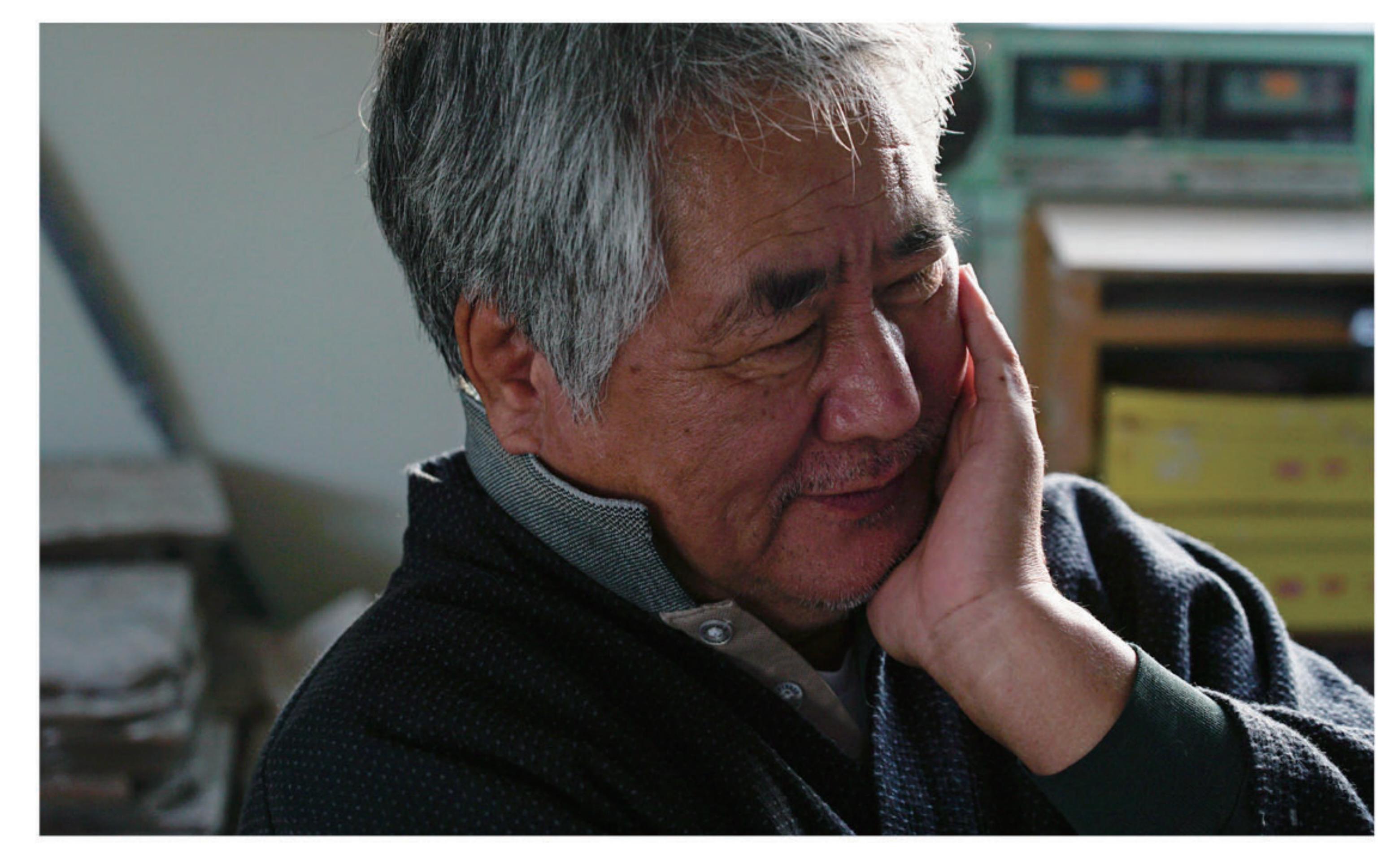
んだ」って頼まれて、「いいよー」って行って。それで他からも「じゃあ、うちのも作ってくれる？」って言われて。これで小遣い取れたっていうのが一番大きかった。他に定職もないし、これでもいいかって思い始めた。

窯元さんたちにとつてすぐ助かる存在だつたんですね。  
根本 常駐の職人さんをもつてがんばつていた窯元もありましたけど、窯元が一人の職人を雇つて、給料出して、売り上げ伸びばしてつてやっていくのはすごく大変なことだと思う。その中で、職人さんも違う職に就いたり、あとは俺みたいななかたちで、窯元一軒じゃなくて何軒か回る職人もいましたね。

震災後は窯元さんが遠くなつてしまつて大変ですね。  
根本 震災のすぐ後は自分のところに機械も何もなかつたから、二本松工房ができるからはそこに行つて組合の仕事をして、窯元一軒じゃなくて何軒か回る職人もいましたね。

窯元が自分の窯を再開してからはそれぞれのところに行つて仕事をして。一年間で九万キロかな、高速道路使って移動してました。ここに工房を建ててからは、窯元さんに粘土持ってきてもらつて、成形できた取りに来てもらつて、つていう大堀にいた頃のやり方でやつてます。  
窯元さんからの注文つて、このサイズのこれを何個作つてほしい、とかだつたんですか。

根本 そうです。それを作れない職人じゃないから。一点もの作るんだつたら作家さんになつたほうがいいんじゃないかな。俺らは百個だつたら百個同じようないけど。自分がやらなくなつたら工房は倉庫にでも使うかなと思って。



根本清己さん

形で、傷のないように作れるかだと思います。変な話だけど、手作りなんだけど「機械で作つた?」みたいに言われると良いなと。俺らが職人になる時は、普通三年間が修行期間。三年間やつてもみんなできるとは限らない。だから、人と同じこと、人以下のことやつてるようじやどうしようもない。三年間でどれだけ貪欲に、自分でやつていくかっていう考え方でないと。

焼きもの関係以外の仕事をしていたことがありますか。

根本 焼きものに関係ない仕事をやつたことないな。地元にいれば生活できただのよ。田んぼも畠も多少あるし。悩んでする仕事じゃなくて、手を動かせつていうの仕事だから、樂は樂なんですよ。仕事がないと苦痛。今月はコロナで仕事がない。

窯元さんのイベントが中止になると、やっぱり商品が動かないから。

震災後も大堀相馬焼の仕事を続けようと根本 焼きものに関係ない仕事をやつたことないな。地元にいれば生活できただのよ。田んぼも畠も多少あるし。悩んでする仕事じゃなくて、手を動かせつていうの仕事だから、樂は樂なんですよ。仕事がないと苦痛。今月はコロナで仕事がない。窯元さんのイベントが中止になると、やっぱり商品が動かないから。

震災後も大堀相馬焼の仕事を続けようと思つたのはどうしてですか。

根本 できる仕事がこれしかなかつたから。窯元さんも仕事頼んでくれるってことになつて、工房にも自腹切つて最低限の機械を揃えた。あと何年できるかわからなければ。自分がやらなくなつたら工房は倉庫にでも使うかなと思って。

根本さんにとつて大堀相馬焼とは? つて聞かれたらどうお答えになりますか。

根本 「焼きもの」です(笑)。職人としては、なりわいのもの。三代統いてきたし、今更やめるわけにもいられないし。大儲けはできなけど、大堀でも地元の人に支えられながらやつてきた。相馬焼がこれからどうなるのかはわからない。各自工房建てて、一代、二代はいいだろうけど、その後またどうするつてなるんじゃないかな。どれだけ後世に伝えていけるか、ですね。

# 亀田 大介

かめた だいすけ

リサーチ 6

日 時：2020年11月5日（木）9:00～

場 所：亀田さんの工房（大分県別府市）

聞き手：青砥和希

（一般社団法人未来の準備室理事長／ライフミュージアムネットワーク実行委員会委員）

原恵理子（福島県立博物館学芸員／ライフミュージアムネットワーク実行委員会事務局）

塚本麻衣子（福島県立博物館学芸員／ライフミュージアムネットワーク実行委員会事務局）

ゆくゆくは古相馬の要素を取り入れた器は作りたいとは思います。自分なりの相馬焼との対峙つて、そういうことかなつて。

大堀相馬焼窯元松助窯の家に生まれた亀田大介さん。1997年に松助窯3代目の父・利雄さんが急逝。窯元を継ぎ、独自の作品を制作していました。震災後は妻の実家がある神奈川県秦野市へ移住し作陶を再開。妹家族を訪ねた際に立ち寄ったのがきっかけで2013年に大分県別府市に移住し、工房を開設。ご自身で薪窯を作り2019年に完成しました。

別府市に来られたのはどうしてですか？  
亀田 妹が三人いて、長女が震災前から大分市に嫁いでいたんです。次女と三女は双葉町と大熊町で、震災直後から長女を頼って二人とも大分に避難していく。二〇一二年の夏に妹たちに会いに、九州に車で旅行をしに来ただんですけど、その時に別府のサービスエリアに寄つて、家内と蕎麦を食べていて、そしたらもう絶景なんですね。別府湾がすごくきれいに見えて、別府の湯煙とともに温かい感じがして風情があるし。で、なんか直感ですね。湯煙の文化だから、薪窯の煙が上がっていても違和感なさうだなという感じで（笑）。

亀田さんの工房、とても素敵で何か不思議な統一感がありますね。  
亀田 大堀の時は昔ながらの細工場でやっていたんですけど、まさか大堀の地を出て焼きものをやるなんて想像していかなかつたので、新たな地で建てられたのが嬉しかつたです。もともとあつた環境つて有

難いんですけど、自分の感覚と違うところもありますし。作業の動線とかのメリハリをつけた工房にしました。震災後、どうしても薪窯で焼きたいっていうのがあって、去年薪窯が完成したことで、僕の中でようやくスタートかなつていう感じがありました。

大堀ではどういう作品を作つていたんですか。

亀田 請戸地区の棚塩というところで、昔瓦を作つていた地区的粘土層を掘らせてもらつて、そうしたら結構面白い粘土があつたので、そここの土を使つたりしていました。大堀相馬焼の窯元さんって県外の業者さんに粘土を作つてもらつていてますけど、僕は僕の思う相馬焼つていうのをやりたくて、焼きものつてやっぱり土がすごく大事なので、地元の土を使いたいというのがありました。

こちらに来られてからは、別府の土を混ぜたり、銀彩の作品を湯の花小屋に置い

て硫化させたりと、別府ならではの作品づくりをされていますね。

亀田 そのほうが自然なのかなと思って。大堀も益子も小鹿田も、もともとはその地で採れる材料があつての焼きものだったと思うので、それが本当は一番自然だとは思うんですね。薪を焚くにも、たぶんその地で生えている木だからとか、土はその土地の個性があつたりとか。そういう意味では、基本的にその土地で採れるものとか、薪窯を焚いて出た灰を釉薬にするとか、そういう循環は大事にしたいと思っています。

お話を聞いていて、大堀相馬焼つて何だろ、何がその土地の焼きものなんだろうなつて思いました。

亀田 わからないですよね。今となつては、

大堀相馬焼つて何なんですかね。定義が難しいですね。その土を使うのか、釉薬がそのままのか、かたちがそのままのか。しかもその場にいない、その地にいないんだつたらなおさらそうです。それぞれ窯元が思う相馬焼もあれば、一般の人が見て思うものもあるでしょう。でもそういうつて、後からついてくるのかなつて。相馬焼つてこの時はこうだつたとか、結果的な総称な気がしますけどね。

亀田さんは、相馬焼を作つていてかと聞かれたら、どうお答えになりますか。

亀田 「作つていない」つて。今僕は相馬焼つていう意識をまったくしていません。自分が作家活動をするうえで、相馬焼つていうキーワードで知つてもらう機会ができますは思いますけど、相馬焼＝亀田大介

ていう感覺では全然作つていません。それで、ゆくゆくは古相馬の要素を取り入れても、ゆくゆくは古相馬の要素を取り入れた器は作りたいとは思います。自分なりの相馬焼との対峙つて、そういうことかなつて。ただ、古相馬は技術も素材もすごいし、今できるかつていつたら、まだできないなつていう思いもありますけど。



2019年に完成した薪窯



別府市の亀田さんの工房



工房近くから見える別府湾の風景



亀田大介さん

# 松助窯・亀田集古館

しょうすけがま・かめたしゅうこかん

日 時：2020年11月26日（木）14:00～

場 所：大堀相馬焼窯元松助窯・亀田集古館（福島県双葉郡浪江町）

現地講師：亀田大介氏

調査者：青砥和希

（一般社団法人未来の準備室理事長／ライフミュージアムネットワーク実行委員会委員）

原恵理子（福島県立博物館学芸員／ライフミュージアムネットワーク実行委員会事務局）

小林めぐみ（福島県立博物館学芸員／ライフミュージアムネットワーク実行委員会事務局）

筑波匡介（福島県立博物館学芸員／ライフミュージアムネットワーク実行委員会事務局）

平澤 慎（福島県立博物館学芸員／ライフミュージアムネットワーク実行委員会事務局）

亀田大介さんの実家、浪江町大堀の松助窯には、父・利雄さんが作った登り窯や薪窯、そして利雄さんが集めた古い相馬焼や自身の作品を展示した「亀田集古館」がありました。現在も帰還困難区域に指定されている大堀地区に一時立入りをして、亀田さんに現地を案内していただきました。

リサーチ6 大堀地区現地調査

遊びつてくれたものからの  
遺してくれたものからの  
大きななと思つて。

ご実家の風景つて、子供の頃の記憶でど  
んな景色が浮かびますか。

亀田 請戸に鮭が上がつてくる時期とか  
に観光バスが入つてきて、学校から帰つて  
くると、バスが何台も停まつていて、売店  
にはお客様がいて、工場では職人さんが  
作つているところを案内して。団体客への  
食事も出していました。夏休みには自分  
でクリスマスとかクリスマスを獲つてきて、  
朝、観光客に売つていました。自分のお小  
遣い。東京の人とかは喜んで買ってくれて、  
すごい、カブトムシが売れるんだって思  
いました（笑）。父が陶芸を始めてからは、  
伊ミシングで見に行つたりしましたけど、職  
人さんがいる空間だったから、そこでずつ  
と見ていたいとかじやなかつたですね。で  
も一人、親のような職人さんがいて。僕ら  
子供も慕つていて、その方のところにはよ  
く行つていました。今日は泊まつて、とか  
言つて、一緒にご飯を食べたり、お風呂に  
入つたり。

十代の頃は、土を触るような機会はあつ  
たんですか。

亀田 小学校の時は、やっぱり産地なので、  
焼きもの大会があつたんですよ。大堀小

学校で。でも残酷ですね、一般の子はい  
いけど、窯元の子なのに負けたら、ね（笑）。

そういう時はその職人さんのところに行つ  
て、大会でこんな作りたいけどどうやる  
の、って。父よりもその職人さんにだいた  
い聞いていましたね。

亀田さんはお父さんがお若い頃に亡くな  
られて、二十二歳で松助窯のいわゆる「当  
主になられたんですね。

亀田 うちの窯元は、初代の曾祖父の時  
から職人さんを抱えてやつていて。その流  
れで僕の父は営業とかをしていたんだっけ  
四十歳から独学でろくろを引き出し  
たんです。もう朝から晩までずっとろくろ  
場でやつっていましたね。組合の集まりの時  
に「ろくろもひねえくせ」と言われて  
悔しいつていうことで始めたんだと思うん  
ですけど、それをきっかけにめり込んで、  
相馬焼の古いものの良さを知つて集めたり  
とか、作家活動も始まつて、日展とか伝  
統工芸展とかのほうを最初はやつてしま  
た。僕も自分が二十二歳の時に父が死ぬ  
なんて思つていなかつたし、人生つてこんな  
ことが起つたんだって思いました。でも、  
それがきっかけでそれまでの甘えは全部な  
くなつて、自分も焼きものと向き合うこ

となりました。集古館に並んでいる父の  
遺作とか古相馬とかを見るとやっぱりす  
ごく良い仕事をしてたなつて思えるし、  
生きている時は直接語ることって、父と子  
なのでそんなになかつたんですけど、遺して  
くれたものからの学びつていうのが大きい  
なと思って。



浪江町大堀の松助窯・亀田集古館

一 窯場にて  
亀田 父が作った穴窯と登り窯です。登  
り窯のほうは崩れた状態。

建物の中に竹が生えていますね。

亀田 ほんと植物の強さを、帰つてくるた  
だに痛感します。この辺りには普段、薪  
がたくさん置いてあるんですが、震災の直  
前、二月にちょうど焼いた後で、薪がなく  
なつた状態ですね。その時焼いた作品は、  
関東での個展に出したんですけど、個展  
が二〇一一年の三月十日からだつたんです  
よ。ちょうど僕、在廊するのに関東に行つ  
ていて、ここにいなかつたんですよ。個展の

二日目に大震災が起きたので、当然お客  
さんも来るような状況じゃなかつたです  
。そこで残つたものは、お世話になつて  
いるギャラリーの方が急遽企画展とかをし  
てくれて、それで販売はしたんです。たま  
に常連さんとかで「あのときの器は大事に  
使つています」と言つてくださると、やつ  
ぱり嬉しいですね。

窯つてやっぱり神様がいますね。神社み  
たいな雰囲気があります。でも神様はも  
う大分に行かれましたもんね。あつちに  
薪窯ができたから。

亀田 大分で頑張ります。



亀田集古館の展示室

父・利雄さんが収集した古相馬焼



「人類の進歩と調和」をテーマに掲げた大阪万博のシンボル「太陽の塔」。進歩優先で進んできた時代の代償として福島が被ることになった問題を世界中に投げかけたかったという五藤さん



A hand-drawn sketch of a multi-tiered Japanese-style serving tray with various compartments, labeled "NETA-ZAKKA" and "DESIGN TALK". The sketch shows a red octagonal base with several smaller bowls and containers arranged around it. A small illustration of a bowl with chopsticks is also present. The drawing is done in a loose, artistic style with some handwritten text and numbers.



## 五藤さんが描いた馬の絵

ととしての大堀相馬焼」という言葉を思いつきました。今後、何かやりたいことはありますか。

りますが、「女性のエンパワーメント」に  
関わりたいという気持ちが沸いています。  
福島に移住して五年、女性たちにかけら  
れる言葉を聞いていましたが、黙つて我慢  
してればいいという風潮が女性のプライド  
を傷つけて、言いたいことを言わせない空  
気があるんぢやうかな。子育てが落ち着  
いたら、何かしたいとは思っています。あ  
ともうひとつは、実現は難しいですが、窯元の  
震災前はあつたそなんですけど、  
奥さん達だけで、一泊一日の婦人会みたい  
のができたら楽しいんだろうな、という  
妄想はしています。

町に住めなくなりつた浪江だからこそ、  
扱りどころとしての相馬焼があつて、  
デザイン性を超えた何かがある。

五藤かおりさんは、大阪府出身。大学在学中の2013年に福島の学生との交流事業で初めて福島県を訪問し、以後ボランティア等で15回ほど来福。大堀相馬焼窯元へのインターン、大堀相馬焼協同組合でのアルバイトを経て、2016年から地域おこし協力隊として活動。組合の事務局に勤務しました。2017年に退職し、窯元の男性と結婚、長男が誕生。現在は大阪府内で暮らしています。

が。大堀相馬焼の二重焼湯呑はこのとき初めて見ましたが、率直に「ダサい」と思いました。

大堀相馬焼関係のお仕事をされるきっかけは?

五藤 大学三年生の時に三ヶ月海外留学に行きました。二〇一一年二月にカンタベリー地震の被害に遭ったニュージーランドのクリエイストチャーチ市を、あえて選びました。大学一年から福島での活動をしていたので、より多くの、似た境遇の方に福島の方々のメッセージを伝えたくて、留学先の学校ではパネル展示で紹介しました。で、見た人からフィードバックをもらつて

五藤　材料の管理や補助金の申請、イベ  
ント出展への準備に加え、通常の販売業  
務も来客時には一々三人で対応していまし  
た。業務量にも驚きますが、将来性など  
心理的な不安もあつたかなと思います。で  
もその状況が組合員には知られていくなく  
て。

見えづらい感じだつたんですね。五藤さん  
がきっかけで大堀相馬焼と地域おこし協  
力隊が繋がつたり、内側からすごく貢献  
されていますよね。

五藤　協力隊はちゃんと続いているから、  
ああ、踏み台になつてよかつたなあつて思  
います。協力隊を辞めた後、窯元に嫁ぎ

赤い墨汁あるじゃないですか、青ひびの黒い墨汁を赤い墨汁にしたらかわいいよねって話が出て。福島で会津木綿を入れ込んだピアスを作っていた女性がいて。そういうのを作りたいと思つたんです。社会や家庭で苦しんでいて打破したいっていう女性に、これ付けてほしいなと思って。かわいいですね、ひびに墨をすり込むつていうのは大堀相馬焼の伝統技法なんですけど、赤の墨でやるのは、すごく良いアイディアだと思います。コンセプトもしつかりあつて。

五藤 なんかネタ帳見返してたら頑張つてて、これは、おいしくなれるご飯の器。

玉藤 かおり  
ごとう かおり

リサーチ7

日 時：2020年11月6日（金）10:00～

場 所：万博記念公園内のカフェ（大阪府吹田市）

聞き手：青砥和希  
(一般社団法人未来の準備室理事長／ライフミュージアムネットワーク実行委員会委員)

原恵理子（福島県立博物館学芸員／ライフミュージアムネットワーク実行委員会事務局）

塙本麻衣子（福島県立博物館学芸員／ライフミュージアムネットワーク実行委員会事務局）

# 五藤 かおり

ごとうかおり

リサーチ /

日 時：2020年11月6日（金）10:00～

場 所：万博記念公園内のカフェ（大阪府吹田市）

聞き手：青砥和希

(一般社団法人未来の準備室理事長／ライフミュージアムネットワーク実行委員会委員)

原東理子（福島県立博物館学芸員／ライフミュージアムネットワーク実行委員会事務局）

塚木麻衣子(福島県立博物館学芸員)ライフミュージアムネットワーク実行委員会事務局



五藤さんがデザインしたピアス



五藤かおりさん

# 原田 雄一 半谷 秀辰

はらだ ゆういち

はんがい ひでとき

リサーチ 8

日 時：2020年11月19日（木）13:00～

場 所：カフェ OBURI（福島県二本松市）

聞き手：福留邦洋

（岩手大学地域防災研究センター教授／ライフミュージアムネットワーク実行委員会委員）

原恵理子（福島県立博物館学芸員／ライフミュージアムネットワーク実行委員会事務局）

江川トヨ子（福島県立博物館学芸員／ライフミュージアムネットワーク実行委員会事務局）

相馬焼は何かつていうと、大堀の焼きものつていうより、やつぱり大堀の人たち、そつちのほうが大きかつたですね。

（原田）



原田さんは大堀の方々とはお父さんの代からのお付き合いなんですね。  
原田 うちの親父はね、田村市から浪江に来た。全然何も知らないところに来たのね。それで大堀の人に受け入れてもらつて、友達にさせてもらってね。ずっと商売やってこれたわけですよ。僕は親父がやつてくれた後にポンと入ってきて商売やつただけなんだけど。だから小さい頃から大堀にはよく連れて行ってもらつてたのね。原田さんのお店から大堀までのぐらいですか。

半谷 車で行くと七キロぐらいある。俺の親父もみんな原田さんのところで眼鏡買つて。  
原田 半谷くんのお父さんに作った眼鏡がまだあるんです。修理して返さないで。だから、僕にとって相馬焼は何かつていうと、大堀の焼きものつていうより、やつぱり大堀の人たち、そっちのほうが大きかったです。ちょうどほら、戦後のベビーブームの頃で、年代的に多かつたんですね。だから結構親しかったからね。

半谷さんは震災前から大堀相馬焼協同組

合の理事長をされていたんですね。  
半谷 震災前の五年と、震災後の五年、だから十年やつた。理事長の前は役員として何だかんで二十年以上やつたの、続けたから、それに混せてもらつてね、一緒にやらせてもらつた。商工会の中でも大きい



原田雄一さん



半谷秀辰さん

部門だったからね、大堀焼っていうのは。  
半谷 東京から先生呼んで、大堀の陶芸の杜で勉強会みたいな始まつたわけよ。製品開発というよりも大堀の里づくりをメインで考えて。大堀相馬焼の里づくりっていう感じでやつてた。

原田 青ひびに合う飲みものの色は何かとかね、あれ凄く面白かったです。お茶とか水とか白湯は良いけど、オレンジジュースが最悪だったね。今のこの生活様式の中では、大堀相馬焼が入っていく分野があるからっていうと、本当に難しいなって、だからこれだけで生きいくつていうのは大変だよねって。あの頃ね。

半谷 大変だけども、結局、避難してあらためてこの青ひびの尊さつていうかなありがたみが分かつたな。俺も大堀ではずいぶんいろんな色かけたり、とんかつ皿だのいろいろ作つた。でも避難してからは、やっぱり売れるのは青ひびだの、二重焼なんだよ。俺の場合はな、里づくりとかをやつてらっしゃる時に、いきなり震災のような事態になつてしまつたことなんだ。震災後も、浪江町の人ら

半谷 あの時は何でこんな千年に一回の地震の時に俺組合長やつてんだけって本当に、晚方になつて涙出ちゃつたもん。悔しくて。でも平成二十四年に二本松工房が仮オープンして、浪江町の後押しを本当にひたひたと感じたわけよ。あの時「馬九行久（うまくいく）」っていう焼きそばの皿を浪江町民にプレゼントするっていうのをやつたんだけども。凄かつたんだぞ。四号線から全部行列になつたんだから。嬉しい悲鳴だ。

半谷さんにとって大堀相馬焼とは？ って聞かれたら何て答えますか。

半谷 やつぱり大堀相馬焼は誇れるものだわな、三三〇年の伝統を受け継いできたものだし、大堀だけでなくて浪江町のためにもやつてきたんだから、死ぬまで相馬焼を継いでやつていくつていう感じは持つてゐるよ。昔から大堀には誇れるものが二つあるってよく言つてゐる。大堀相馬焼と高瀬川だ。里づくりもな、大堀相馬焼と大堀の里を自分で誇れるものだと思つて始まつたことなんだ。震災後も、浪江町の人ら

が後押してくれたつていうことが自分にも分かつたから、やつぱり頑張らなきやなねえなつてあの時は思つたよ。本当に浪江町民の気持ちはあるがたかつたもん。



震災後も浪江町の人らが後押してくれたつていうことが自分にも分かつたから、やつぱり頑張らなきやなんねえなつてあの時は思つたよ。

（半谷）

# 二本松コスモス会

にほんまつこすもすかい

リサーチ9  
日 時：2020年12月10日（木）13:30～  
場 所：まちづくりNPO新町なみえ（福島県二本松市）  
聞き手：福留邦洋

（岩手大学地域防災研究センター教授／ライフミュージアムネットワーク実行委員会委員）  
小林めぐみ（福島県立博物館学芸員／ライフミュージアムネットワーク実行委員会事務局）  
原恵理子（福島県立博物館学芸員／ライフミュージアムネットワーク実行委員会事務局）



二本松コスモス会 12月の定例会にて

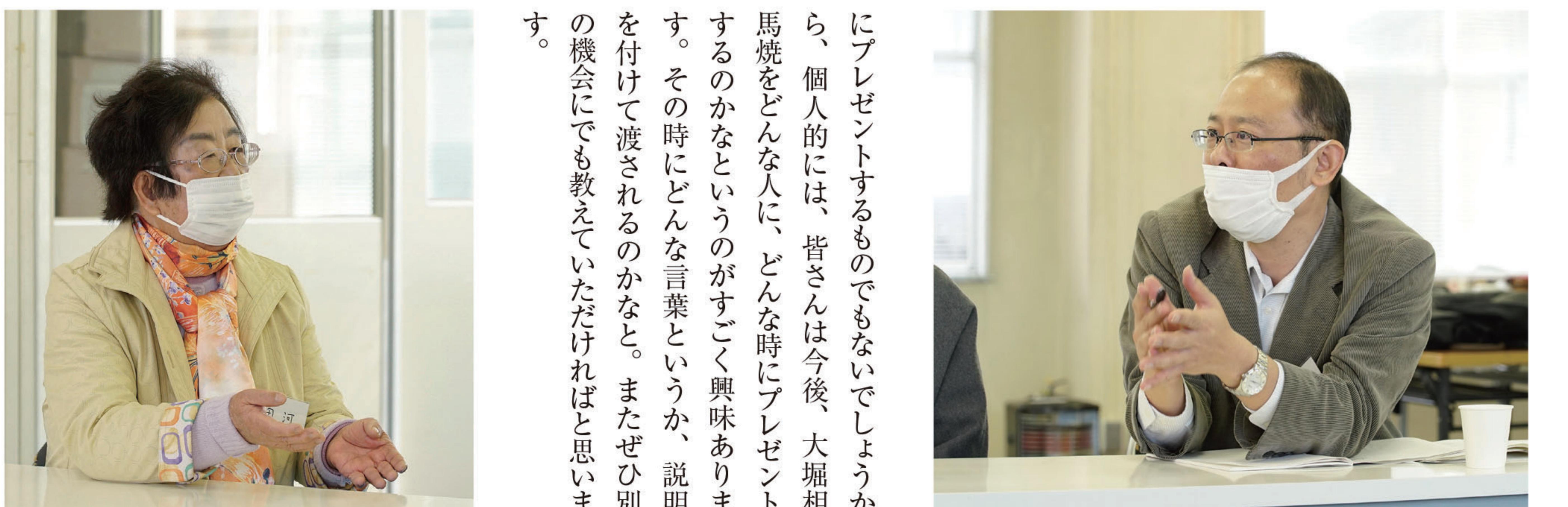
コスモス会は、震災後に浪江町から避難した町民が各地で結成した自治会グループで、“コスモス”は浪江町の花・コスモスにちなんだ名称です。リサーチでお話をうかがった二本松コスモス会は会員40～50名。そのうち定期的に活動に参加しているのは10～15名ほどだそうです。毎月開催する定例会では、そば打ちやお茶会などレクリエーション活動も行っています。当日お話ししてくださった方々（15名 敬称略）：五十崎榮子（代表）、上野とし子、管野知子、北末子、佐藤生子、柴口まつよ、鈴木まつ子、田河テル子、田河幹男、田中スエ子、本田玉恵、原田雄一、三浦一雄、山形きぬよ、山形式。

だから本当、何とも思っていなくていたのがね、あんな立派なものあつたんだつてあらためて分かつたような感じ。気付かなかつたね、前はね。

- 大堀相馬焼は皆さん的一番近くにあつた焼きものだと思います。今日は、浪江町の皆さんにとって大堀相馬焼はどんな存在だつたのかというお話をいろいろ教えていただけだと大変ありがたいです。
- 私は浪江町の大堀地区で生まれたんです。隣も相馬焼をやってるところで、小さいときから相馬焼に触れていて、壊れたものひろってままごとして遊んで。相馬焼は一番のふるさとの思い出です。若いうちは相馬焼は、本当に当たり前のものだったんですけども、こちらに越してきても相馬焼が恋しくなつて、相馬焼に凝つて、家の中は相馬焼いっぱい飾つてあるんです。今こちらでもお家で使つてている方はどれくらいいらっしゃいますか。
- 浪江にいる時は、あんまり相馬焼を家庭で頻繁に使うことがなくて、お葬式とか結婚式とかのお引き物によく急須とか徳利とかもらつて。それを使うかといふと、一年に一回くらい、お正月に
- 震災の後だもん。
- 今はおしゃれだもん。椿の花が描いてあります。昔の相馬焼とは全然違うんですね。当たり前に地元に窯元があつて、普通に相馬焼が作られて売っていたのが、震灾ですか。



- 災を経てそういう状況じゃなくなつてしまつた時に、どう思われましたか。
- だから本当、何とも思つていなくていたのがね、大堀は全然出入りもできなくなつちやうし、あんな立派なものあつたんだつてあらためて分かつたような感じ。
- うん、そう。気付かなかつたね、前はね。
- 福留 皆さんが震災後、二本松に来られてからの大堀相馬焼との関係や見方が、浪江に住んでいた時とずいぶん変わつたというところにすごく、はつとさせられました。いろいろな思い出とともに大堀相馬焼に来られてからのほうがより強く思い起きたかなと思いました。今の大堀相馬焼は非常に多種で、お値段もそれなりにするということなので、そう頻繁にプレゼントするものでもないでしようから、個人的には、皆さんは今後、大堀相馬焼をどんな人に、どんな時にプレゼントするのかなというのがすごく興味あります。その時にどんな言葉というか、説明を付けて渡されるのかなと。またぜひ別の機会にでも教えていただければと思います。



- 大堀相馬焼は皆さん的一番近くにあつた焼きものだと思います。今日は、浪江町の皆さんにとって大堀相馬焼はどんな存在だつたのかというお話をいろいろ教えていただけだと大変ありがたいです。
- 私は浪江町の大堀地区で生まれたんです。隣も相馬焼をやってるところで、小さいときから相馬焼に触れていて、壊れたものひろってままごとして遊んで。相馬焼は一番のふるさとの思い出です。若いうちは相馬焼は、本当に当たり前のものだったんですけども、こちらに越してきても相馬焼が恋しくなつて、相馬焼に凝つて、家の中は相馬焼いっぱい飾つてあるんです。今こちらでもお家で使つてている方はどれくらいいらっしゃいますか。
- 浪江にいる時は、あんまり相馬焼を家庭で頻繁に使うことがなくて、お葬式とか結婚式とかのお引き物によく急須とか徳利とかもらつて。それを使うかといふと、一年に一回くらい、お正月に
- 震災の後だもん。
- 今はおしゃれだもん。椿の花が描いてあります。昔の相馬焼とは全然違うんですね。当たり前に地元に窯元があつて、普通に相馬焼が作られて売っていたのが、震灾ですか。

- お客様が来たときにお酒を燶をして飲むというくらいで。相馬焼は安いものでなくつたし、日常はあまり使わなかつたんですね。ただ、今回避難して、あらためて浪江町の大堀相馬焼というのがすごいんだなというのを知つたようで、本当に恥ずかしいんですけど。それで恋しくなつて福島の窯元に行つて買ったのが三八〇〇円のジョッキ。ピンクがかつたので、それ使ってます。
- 以前は相馬焼を日常で使うという感じじやなかつたんですか。
- 普通にあつても日常的には相馬焼でものを食べるとかというのはしない。
- 箱に置いて棚の中にずっとしまつてあるという感じで。
- 実用的ではなかつたね。
- お茶飲み茶碗なんかも重かつたんですね。二重になつたから。私あれ嫌。
- 私も。最初嫌だつた。お掃除するのに、洗つたりするのに面倒くさくて。ひとつ





白河市の大堀相馬焼窯元いかりや商店



**山田 慎一 吉田 直弘**  
やまだ しんいち よしだ なおひろ

リサーチ 10  
日 時：2020年12月14日(月) 10:00～  
場 所：大堀相馬焼窯元いかりや商店（福島県白河市）  
聞き手：青砥和希

(一般社団法人未来の準備室理事長／ライフミュージアムネットワーク実行委員会委員)  
「ふるさとキャンパス」で滞在中の川村彩乃さん（青山学院大学1年）、  
勝田陸さん（明治大学2年）、霧生彩乃さん（東京農業大学3年）、  
「ふるさとキャンパス」オブザーバーの江田智子さん  
原恵理子（福島県立博物館学芸員／ライフミュージアムネットワーク実行委員会事務局）

浪江に住まずに白河で仕事をしていて、これから自分の名前で売っていく時の位置づけとか、大堀相馬焼って言つていいのかなとか、そこら辺がちょっと難しいです。

(吉田)



吉田直弘さん

てるとわりとストレスがないんですよ。あと、私らって今まで自分で作った器を使って生活してきたんですね。もちろん買ったものを使ってる時もありますけど。それが、震災のあとに支給してもらったのが型で作った器だったんです。それ使ってる時に感じたのは、同じ形のものを使ってるとき、ちょっとしたストレスを感じるのかな

と。やっぱり手作りのものってそれぞれ違うじゃないですか、形も。ちょっとリラックスするような気がするんです。

吉田さんは兵庫県のご出身で、大学は京都だつたんですね。焼きものの産地が全

国にある中で、こちらに来られたのはど

ういう理由だったんですか。

吉田 こっちの職人さんの仕事がすごくレベルが高くて。で、大学卒業する時にもちょっととろくろを勉強したいというのがあって、相馬焼の二重焼は普通の焼きもの二倍量ひけるから、二倍速くなるかなとなるほど。その意見は斬新で面白いですね。大堀相馬焼という、ご自身の出身地とは全然違うところの伝統的工芸品の窯元さんで修業をされているわけですが、どう思われますか。

吉田 僕自身が協力隊として入ってきて、浪江に住まずに白河で仕事をしていて、これから自分の名前で売っていく時の位置づけとか、大堀相馬焼って言つていいのかなとか、そこら辺がちょっと難しいです。僕も将来、窯元になりたいと思っているんで

結構短期間にたくさんの固定客というか、リピーターの方も来てくれるようになったんです。

山田 そうですね。いま小学校とか、中学校の陶芸教室で、年間七〇〇、八〇〇人教えてます。保育園なんか行くとね、みんな楽しんでやっているみたいなので、なるべく子供らが作りたい作品に近づけようとしてやると、色塗りの種類が増えた吉田くんがどんどん大変になる。でも大変だけど楽しんでやつてるところもあるの

山田さんはいま白河で大堀相馬焼を作っていますが、本来の产地とは違う場所で作るとなつた時にどうお考えになつたんですか。

山田 あんまり難しいこと考えたわけ

じゃないです。本当にやることはこれしかないのです。失敗したらみんなでアルバイトするかみたいな話をしてたんです。で、実際に始めてみたら、今まで会津とか、あとは益子とかに買いに行つたりしてた方が、興味を持つて立ち寄つてくれて。実際に使つたら非常に良いっていうことで、



やつぱり手作りのものってそれぞれ違うじゃないですか、形も。ちょっとリラックスするような気がするんです。

(山田)



山田慎一さん

# 浪江町立津島小学校

なみえちょうりつしまじょうがっこう

校長

木村 裕之

きむら ひろゆき

6学年担任

武内 弘子

たけうち ひろこ

リサーチ11

日 時：2020年12月21日（月）15:00～

場 所：浪江町立津島小学校「10年間ふるさとなみえ博物館」内（福島県二本松市）

聞き手：原恵理子（福島県立博物館学芸員／ライフミュージアムネットワーク実行委員会事務局）

平澤 慎（福島県立博物館学芸員／ライフミュージアムネットワーク実行委員会事務局）



「10年間ふるさとなみえ博物館」大堀相馬焼展示コーナー



木村裕之校長



なみえっ子カルタ「相馬焼 伝統工芸 復活だ」



最後の児童の須藤嘉人さんが作った大堀相馬焼の皿



震災後、二本松市に移転した津島小学校

震災後、二本松市で再開した浪江町立浪江小学校・津島小学校では「ふるさとなみえ科」という授業で浪江町と避難先の二本松市について学んできました。その取り組みを残し伝えるのが「10年間ふるさとなみえ博物館」。津島小学校校長の木村裕之先生と、総合的な学習の時間担当の武内弘子先生に「ふるさとなみえ科」の様々な活動の中で、大堀相馬焼はどのような存在だったのかを伺いました。

「ふるさとなみえ科」に大堀相馬焼の体験があるのはどうしてですか。

木村 震災後、何を核にして教育活動を開いていくか当時の方々が頭を悩ませた時に、地域を離れて、戻れない状況だからこそ、あえて地域を核にして学習を開いていくという発想が生まれたと聞きました。そんな中で、地域学習を核にしても実際に出かけていく地域がないので、だつたら学校を模擬的な地域の場所にして、じゃあそのためには担っていた人が必要だと、いうことで、その人たちをお呼びする。出かけていけるところは出かける。とにかく、大堀相馬焼については近くに二本松工房があつたので行きやすいのと、季節や天候に左右されずに継続的にできるということで、大堀相馬焼については近くに二本松工房があつたので、実際にできることもありました。本物の体験ができるなかつたので、疑似体験になってしまったので、大堀相馬焼での子供たちの反応はどうでしたか。

大堀相馬焼体験での子供たちの反応はどうでしたか。

武内 子供たちは一年生の時から大堀相馬焼体験をしていて、子供たちの中では毎年作つていけるんだっていうのと、高学年の活動を見て、大きくなつたらろくろを使えるんだっていう意気込みというか、やってみたっていうのがすごく強くて、「なみえっ子カルタ」の中にも「僕の夢、ろくろで大堀相馬焼」って。あれは今中三の子が低学年の時に先輩のろくろを見て書いたものなんです。その子は出身が大堀地区だったんで、六年生になった時も大堀相馬焼を世界に広めたいみたいなことを言つてるぐらいだったんですね。子供たちの中にはやっぱり一つの大きなものとして残つてるんじゃないかなと思います。

九月には大人の皆さんも学校に来られて陶芸教室をしていましたが、大人の方々との関わりはどうでしたか。

木村 学校が再開する時から自前でいろいろやつてくださつたりとか、これから学校をどうしていくべきか話し合いをされてるんじやないかなと思います。

木村 学校と出会つたりとか、同じことを体験してきた卒業生と一緒になつた時に、眠つていた引き出しを開けて会話をしたりとか、懐かしんだりとか、あらためて理解するきっかけになればいいのかなって思いました。本物の体験をさせて理解させることを目的にはやつてますけど、大人になって、引き出しを開けた時こそ本当の意味で繋がる時じゃないかなと。自分で使う時に初めて使える経験になるんじゃないのかなと思うので。しばらくしまつておいてもなかなかだけのものは引き出しにしまえてるのかなっては思つてますよね。

武内 これから中学、高校にいつたらその時々を楽しんで思いっきり生きてくればいいなと思いますね。で、何十年経つて大人になって、浪江に行つた時に、僕も大堀相馬焼作つたとか、そんなことでも思い出して結びついてくれたらいいのかなと。そこは終わつても引き継いでもらえたなら嬉しいなと思います。



武内弘子先生



「10年間ふるさとなみえ博物館」にて

大人になつて、引き出しを開けた時こそ本当の意味で繋がる時じやないかなと。

**10年間ふるさとなみえ博物館**

「ふるさとなみえ科」の10年間を伝える博物館「10年間ふるさとなみえ博物館」は、津島小学校最後の児童となった須藤嘉人さんが初代館長となって開館準備を行ったものです。

大堀相馬焼体験で作った作品をはじめとするさまざまな資料（=成果品）を展示しました。博物館の館名は須藤嘉人館長の命名によるものです。そして博物館の顔となる看板も館長のアイディアを活かしながら、小学校の先生方、浪江町の方、二本松市の方の協力で完成させました。

**「10年間ふるさとなみえ博物館」看板のできるまで**

1 どんな看板にしようか？

博物館の看板は、大堀相馬焼で作った文字を二本松家具の工房に作ってもらった飾り板に貼付け、浪江と二本松のつながりを表現することにしました。館長の提案は、展示室となる教室の戸に看板を取り付ける案。大人一同は驚きとともに大絶賛。

2 看板の文字作り

浪江町の伝統的工芸品・大堀相馬焼の窯元春山窯の小野田さんご夫妻に教えていただきながら浪江町の方々と看板の文字を作りました。どの文字を誰が担当するか館長が割り振りました。コスモスや波、鮭など浪江町を連想する飾りもたくさんできました。

3 看板の文字の色

大堀相馬焼春山窯・小野田さんのもとに届いた色付けの指示書。文字の釉薬の色の指示も須藤嘉人館長によるものです。

4 焼き上がった文字の取り付け

二本松家具の工房に製作してもらった飾り板に文字を取り付ける作業の担当者は校長先生。校長先生が文字の形に合わせて窪みを彫り、しっかりとめこみながら取り付けました。

5 「10年間ふるさとなみえ博物館」看板完成！！

教室の引き戸に設置し、博物館を象徴するような看板が完成しました。

大堀相馬焼で文字や図柄を作った「10年間ふるさとなみえ博物館」の看板

**ふるさとなみえ科の概要**

東日本大震災及び福島第一原子力発電所事故後、避難先の二本松市内にある廃校舎を利用し、平成23年度に浪江町立浪江小学校が、平成26年度に浪江町立津島小学校が再開しました。

平成24年度には、総合的な学習の時間を中心に「ふるさとのよさを発見する・伝統文化を学ぶ・浪江町の人々と交流する・ふるさとの未来を考える」の4点を軸に進めた学習活動「ふるさとなみえ科」を創設しました。令和2年度までの10年間の学習では、大堀相馬焼や郷土の食文化の体験をとおしてふるさとの伝統や文化を学び、新聞としてまとめたり、カルタの形にまとめた「なみえっ子カルタ」づくりなどに取り組みました。浪江町の思い出や名物を方言を使って歌詞にちりばめた歌「んだげんちょ」は、子どもから大人まで楽しめる「んだげんちょダンス」や「ダンベル体操」として発展しました。

令和元年度の浪江小学校の休校に続き、津島小学校の最後の一年となった令和2年度には、学びの集大成としてこれまでの取り組みを「博物館」という形でまとめ、二本松に来てからの浪江小・津島小の10年間を残し、伝える場をつくりました。

「ふるさとなみえ科」での浪江町の人々との交流は、子どもたちにとってふるさとを誇りに感じ、ふるさとのために自分ができることは何かを考える何よりも大切な学習となりました。同時に、子どもたちの学習は、ふるさとを離れた浪江町の人々に大きな感動を与えることができました。

(津島小学校HPを参照させていただきました)

大堀相馬焼はやつぱり、自分のもの集めの原点だと思いますね。他のものを集めてみてもしようがないしさ。（末永）

## 堀耕平

ほり こうへい

## 末永 福男

すえなが ふくお

リサーチ12

日 時：2020年12月23日（水）13:00～

場 所：南相馬市博物館（福島県南相馬市）

聞き手：原恵理子（福島県立博物館学芸員／ライフミュージアムネットワーク実行委員会事務局）

江川トヨ子（福島県立博物館学芸員／ライフミュージアムネットワーク実行委員会事務局）



末永さんのコレクション第一号の松竹梅徳利



末永さんの大堀相馬焼コレクション



堀耕平館長



末永 この松竹梅のは、私のコレクション第一号なんです。浪江町役場に勤めてた時に、仕事で行った家の窓の下にはしばらくに割れた瀬戸があったんですよ。それをもってきて組み立てて。その時はこれ相馬焼だつて全然わんなかつたの。相馬焼は青ひびきばかりで、まだその頃はこんなにいろんな種類あると思わないからね。そのあと別の仕事で発掘調査をした時に、竹島國基先生を連れてきて。その時に先生に見えてもらつたら、「これは本物の良い大堀焼だよ、大事にしろ」って言われて、そ

ね。末永さんにとって、大堀相馬焼の魅力というか、集めるようになった動機をもう少し詳しく教えていただけますか。

末永 種類がまず多かった。陶器でできるものは何でも陶器で作つてた。炊いたご飯を炊き直すやつとか、酒器、お茶の道具、それから湯たんぽ、尿瓶、陶枕、そんなものをつくつたりね。大堀相馬焼はやっぱ

れで取つておいたやつなのね。平成二年か三年だ。結局それで自覚めなんですよ。一番北は宮城県の七ヶ宿町か、あとは南はせいぜい本宮だね集めに行つたのは。七ヶ宿にね、当時、骨董屋三軒あつたんですよ、あんなちっちゃいところに。

骨董屋さんとも交流があつたんですね。末永 浪江で骨董屋やつてた男がね、俺に触発されて相馬焼集めたんだけど、死んでしまつて、奥さんが葬式出すのに困つて、「末永さん来て」と言うから。まるつきり頼りにされてさ。俺が葬式出したみ

り、自分のもの集めの原点だと思いますね。他のものを集めてみてもしようがないしさ。例えば古伊万里に興味持つてさ、コピーダかわりもしないでつかませられてもしょうがない。それよりも、大堀相馬焼はつくり手にも友達がいたし。大堀の資料収集家の山田秀安さんが亡くなつてからは、集めたものを基にして系統立てて。普通は系統立ててから、もの集めるんだろうけどさ。

これからも、まだまだ集めたいですか。

末永 そうね。やっぱり落ち着き先が見えないことは、これ以上無理だなと思う。浪江町に資料を落ち着けられるんだつたら、もうちょっと本気になつて探し回つてみたりしてもいいけどね。やっぱり双葉町の歴史民俗資料館、あのぐらいのもの、浪江にも欲しいよね。

堀さん、竹島先生のコレクションをはじめとして、南相馬市博物館には大堀相馬焼が收藏されていますが、この博物館と大堀相馬焼の関係はどういったものなんですか。

堀 ここは元々が原町市立博物館で、それでも、つくるときから、調査研究とか資料収集の範囲を、原町市だけじゃなく

て、相双管内に想定していました。相双地区の範囲といふのは、要は野馬追の範囲なんですね。江戸時代の同一歴史文化の中心的な調査研究機関というか、生涯学習施設を目指したときに、大堀焼もその範疇に入つてきて。その中で竹島國基さんの大堀焼関係の資料は、一つのコレクションとしてあつたわけですけど。ただ、残念ながら、焼きものがわかる学芸員がないので、なかなか大系だった収集とか、展示も十分にできているわけではないです。地域にある博物館だから、この地域の歴史文化を伝えていくということでは、大堀焼はもっと評価されて良いと思う。そういうことを知つてもらうきっかけをつくるのも博物館の、学芸員の一つの役割だと思うんですね。

震災の前と後で、役割として変わったなと感じたところはありますか。

堀 表立つては出てこないけれども、やっぱり震災前よりも、特に大堀の系譜にあらざる人たちが地元でやれない状況がある今だからこそ、あるいは将来だからこそ、そこにあつたことを伝えるということは必要というか、求められているんじゃないかな

この地域の歴史文化を伝えていくことでは、大堀焼はもつと評価されて良いと思う。

（堀）



南相馬市博物館



末永福男さん

相馬



大堀相馬焼窯元春山窯 13代目の大野田利治さんは、2015年より大堀相馬焼協同組合の理事長を務めています。震災後、いわき市に仮設工房を設けて作陶や陶芸教室を再開。2017年11月に本宮市に拠点を移し、自宅と工房、店舗を新たに開設しました。小野田さんは震災前から特に陶芸教室に力を注いでいました。



頑張つていいくしかないですけども。そうなれるように、まだまだこれから先、地元の誇りだと思つてもらうのが一番。

いま陶芸教室には月に何人くらいいらっしゃるんですか。

小野田 五十人以上はいます。

すごいですね。皆さんどのように「ここ」を見つけて来られるんですか。

小野田 ここはね、前の通りを何回か通りで、何だろうなって入ってくるという感じですね。あとはネットで調べて。小野田さんが震災後まずいわきで工房を再開されたのは、陶芸教室の生徒さんから土地の紹介があつてということなんですが、生徒さんたちは震災直後どんな反応だったんですか。

小野田 「先生、何してんの」とか尋ねられたりしていて、そのうち「うちんどこ、土地空いてっから使わねえがい」なんて言われて。場所を見て、すぐ六号線もあるからいいなと思って。陶芸教室を再開したら、皆さんやつぱり前からやってきたことをやりたかったんでしようね。喜んでいま

したけどね。

小野田さんにとつて大堀相馬焼とは?と聞かれたら、何てお答えになりますか。

小野田 一つの芯、根本に持つているやつというか、そこから始まるんですけども。私としては、父親が早いうちに亡くなつて。私が三十六歳で、親父が六十三歳だったんですけど、ガンで余命半年って言われたんですけど、ガンで余命半年って言われて。その半年間でたぶん、自分の覚悟が決まつたと思うんですね。うちの父の背中を超えるというか。ここは一つやってやろうかなっていう感じですよ。

小野田さんは本宮に工房やお店を開設されました。それが、「復興」したと思われますか。

小野田

いや、自分としては全然、まだ本当に通過点くらいの感じ。そこまで多くは望めないけど、理想としては元いた場所か、浪江のどこかでできたら一番いいなと思うんですけどね。その想いは消えないですね。

道の駅なみえに新しく大堀相馬焼の伝承



陶芸教室の生徒の作品



父・春吉さんの写真

父・春吉さんの作品



店舗の棚。本宮に来てから新たに使い始めた釉薬の製品もある

館ができる、組合の拠点にもなるということですが、どういう施設にしていきたいですか。

小野田 浪江の人たちが来て、陶芸教室なり何なりで学んだり、そこで和んだりできるような施設になると良いかなと思うんですけどね。そこで大堀相馬焼に少しありますが、どう思われますか。

小野田 浪江の人たちが来て、陶芸教室なり何なりで学んだり、そこで和んだりできるような施設になると良いかなと思うんですけどね。そこで大堀相馬焼に少しでも興味を持つてくれて、自分でもやってみようかなっていう子が出てくれるといいのかな。組合自体も本当に大変な時期なので、伝承館ができたらそこからもうひと踏ん張りですよね。伝承館が一つの起爆剤になればいいと思うんですけどね。

小野田さんは学校でも陶芸教室をさせていて、浪江小、津島小でもずっと大堀相馬焼を教えてこられましたが、小学校でそういう体験をする時間があることについて、どう思われますか。

小野田 大堀相馬焼を勉強してもらうのは、私たちとしても助かるし、やっぱり経験してもらつて、自分の中に馬の絵を描いた

りした思い出が残ってくれれば、大きくなつてから、また帰つてくるのかなと思うんですけど。

大堀相馬焼は浪江の皆さんにとつてどんな存在でありますか。

小野田 震災前は、町の人たちが大堀相馬焼をどんなふうに見ていたかは意識していないかったです。でもやっぱり昔から見慣れている風景がまた戻つてきたらしいのかなって思います。大堀相馬焼は地元の誇りだと思ってもらうのが一番。そういうように、まだまだこれから先、頑張つていくしかないんですけども。



本宮市にある大堀相馬焼窯元春山窯。馬の絵が目印

小野田利治さん



本事業の実施にあたり

浪江町、大堀相馬焼に関する皆さまをはじめ

多くの方々のご協力を賜りました。

心より御礼申し上げます。

文化庁令和2年度地域と共に創した博物館創造活動支援事業  
ライフミュージアムネットワーク2020

地域資源の活用による地域アイデンティティの再興プログラム

大堀からの10年

寄稿 青砥 和希（一般社団法人未来の準備室理事長／ライフミュージアムネットワーク実行委員会委員）  
福留 邦洋（岩手大学地域防災研究センター教授／ライフミュージアムネットワーク実行委員会委員）  
堀 耕平（南相馬市博物館館長／ライフミュージアムネットワーク実行委員会委員）

編集 原 恵理子（主担当 実行委員会事務局）  
川延 安直／小林めぐみ／塙本麻衣子／筑波 匠介／平澤 慎（実行委員会事務局）

デザイン 栗原 真理（株式会社 CIA）

撮影 赤間 政昭：リサーチ 2、5、6（浪江）、8、9、10、11、12、13  
衣笠名津美：リサーチ 7  
畠 直幸：リサーチ 6（別府）  
本郷 毅史：リサーチ 3  
三浦 結香：リサーチ 1、4  
小林めぐみ／筑波 匠介／原 恵理子／平澤 慎

印刷 北斗印刷株式会社

発行 ライフミュージアムネットワーク実行委員会事務局  
〒965-0807 福島県会津若松市城東町 1-25（福島県立博物館内）